

## 「活動の概要と研究成果」

NO.J2428

活動題目:インドネシアでのモスクと宗教的寛容性に関する大規模データを用いた  
実証研究

所属:アジア経済研究所

氏名:水野祐地

インドネシアにおけるイスラームの保守化現象は、特に1990年代以降に顕著となっている。では、宗教的不寛容性は、いかなる要因と関係しているのだろうか。ムスリム社会の文脈においては、宗教的敬虔さや経済水準、教育水準などが提起されているが、どれも明確な結論には至っていない。本研究課題では、これまで研究が不十分であった宗教施設とムスリム社会の宗教的不寛容性との関係性に着目した。モスクは、不寛容な言説が広まる経路となる可能性が指摘されている。また、少数集団であるキリスト教の教会は、寛容性を高める「接触仮説」と、不寛容性を高める「象徴的脅威理論」が考えられる。インドネシアの宗教省はモスクと教会の大規模データを公開しているが、位置情報の欠落など様々な欠陥がある。本研究チームは現地調査の一環で宗教省を訪れ、データの欠陥について確認した後、データ収集チームを結成し、モスクと教会のGISデータ収集を行った。構築したデータから、インドネシアのモスクと教会の空間的分布を把握することが可能となった。ここから、インドネシアにおけるムスリムの宗教実践と信仰観に関する公開世論調査データと宗教施設のGISデータを組み合わせ、宗教施設と宗教的不寛容性との関係性に関する分析を行った。暫定的な分析結果からは、モスクと不寛容性は帰無仮説にとどまった。一方で、教会の密度は政治的イスラーム支持と集団間関係に関する不寛容性についてマイナスの関係が見られた。これだけでは因果関係まではわからないが、教会の密度をキリスト教徒の人口と捉えると、「接触仮説」が支持されている可能性がある。これら仮説形成は、不寛容性に関する実証分析をさらに発展させていく貴重な土台となった。また、一から構築した教会のGISデータは、りそなアジア・オセアニア財団の助成金によって構築されたものとして、データレポジトリにて一般公開することを予定している。